

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：35404

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370192

研究課題名(和文) ナチ映画を巡る現代ドイツ・ナショナリズムのメディア論的研究：2010年代の新展開

研究課題名(英文) Analyzing Modern German Nationalism in Films on Nazi-Germany from Media Studies
Point of View: New Developments since 2010

研究代表者

古川 裕朗 (Furukawa, Hiroaki)

広島修道大学・商学部・教授

研究者番号：20389050

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：2000年代から2010年代にかけてのドイツ映画賞作品賞受賞作のうち、特に《白バラの祈り》と《ハンナ・アーレント》に焦点を合わせて研究を行った。《白バラ》については、同じく「白バラ」を題材とした映画で1980年代にドイツ映画賞を受賞した2つの作品および連邦大統領による「白バラ」追悼記念講義との比較考察を行った。《アーレント》については、作品の分析に加え、この映画がモチーフとするアイヒマン裁判が行われた1960年代を含む戦後のドイツ・アイデンティティに関して様々な言説と演説の分析を行った。これによって“良いドイツ国民”の描写から“凡俗なドイツ国民”の描写へと転換する傾向の一部を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research examines the films that won at the German Film Awards in the 2000s and 2010s, focusing in particular on the films Sophie Scholl and Hannah Arendt. When I studied Sophie Scholl, I compared this film with two other films that won at the German Film Awards in the 1980s. These two films treat the White Rose, a German Resistance Group that opposed Adolf Hitler's Nazi Germany, similarly. Furthermore, I compared Sophie Scholl with the White Rose memorial lectures given by the presidents of the Federal Republic of Germany. With regard to Hannah Arendt, in addition to the analyses of this film, I studied a variety of remarks and statements about the German identity after World War II. They include comments about German identity in the 1960s, when Eichmann's trial, which was the motif of this film, was held. Through these activities, this research revealed a tendency toward a change from the depiction of "a good German national" to the depiction of "a banal German national."

研究分野：美学・芸術文化学

キーワード：ドイツ・アイデンティティ ドイツ映画 ナチ 白バラ アーレント

1. 研究開始当初の背景

これまで、ナチを題材とした2000年代のドイツ映画に関しては、次のことが強調されてきた。1) 登場人物が国家間移動を行うトランス・ナショナル(多国家横断的)な物語設定、または登場人物が他国民や他民族と交流するインター・ナショナル(多国家間的)な物語設定を有している。2) メロドラマ的・娯楽的な筋書きの中で、ナチ関係者をも含む個人の心理に焦点が合わせられ、ナチの時代はノスタルジー化、商品化、陳腐化、没倫理化(善悪不問)脱政治化された。

しかし、研究代表者が予備検証を行ったところ、これまではドイツ社会の中で表立って主張するのがはばかれてきたドイツ・ナショナリズムが、そうした多国家横断的・多国家間の物語設定を逆に弁明的に有効利用しながら、発露してきているのを認めることができた。そして、多くのナチ映画が“良きドイツ国民”を積極的に描き出し、それゆえに映画の中では、ナチと一般国民が切断され、ナチの物語の新たな政治化が始まっていると考えた。

ところが、そうした傾向は、2010年代に入り、さらに次のような新たな展開を見せているように思える。1) 2010年代のドイツ映画賞受賞作を鑑みると、ナチ映画は数量においてメディア上の存在感を増している。

2) 2010年以降受賞のナチ映画では、多国家横断的・多国家間的な物語設定が継承されつつも、清濁併せ呑む“平俗なドイツ国民”の姿が描かれる。3) 2010年以降受賞のナチ映画では、普通のドイツ国民にも内在するナチ的なものが主題化される。よって、いったんナチと切断された一般ドイツ国民は、再びナチとの連続性のうちに置かれる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、2000年代から2010年代中葉までのドイツ映画賞(作品賞)を受賞したナチ関連映画に関し、ドイツ・ナショナリズムの観点から基礎的な通史を作成し、2010年以降の「新展開」の実態をメディア論的に解明することである。具体的には多国家横断的・多国家間的物語設定の継承、ナチ関連映画の受賞率の増大、“良きドイツ国民”から“凡俗なドイツ国民”への描写の転換、一般国民とナチ・ドイツとの連続性の強調といった2010年代初頭における特徴の行方を見定める。特に歴史事件を題材としたナチ映画を対象とする。映画本体と歴史資料を照合し、映画がメディアとして焦点化する価値観を洗い出す。そして他のメディアとの反発・同調・競合で雰囲気的に醸成される現代ドイツ・ナショナリズムの内実・力動性・複雑性を観察記述する。

また本研究は、以上の当初研究を発展させ、研究の最終年度を前にして、新たな課題「現

代ドイツ映画を巡る「難民としてのドイツ人」:政治メディア論的研究」へと引き継がれることになった。というのは、当初研究の結果を振り返ったとき、ナショナルな傾向はグローバルな物語設定を利用するだけでなく、逆にグローバルな価値の推進に利用されている可能性も見えてきたからである。また「ナチ」という題材は、同じ作品の中で他の題材と複合的な形で存在する。それゆえ、受賞作に共通する「難民としてのドイツ人」というイメージを上位概念として、より包括的な視点から通史を捉え直すこととした。

3. 研究の方法

当初研究課題

1) 2000年以降のドイツ映画賞(作品賞)を受賞したナチ映画のうち、まったくの創作物ではなく、特定の歴史事件を題材とした作品を優先的に取り上げる。

2) 特定の歴史事件を題材とした受賞作品の物語構造を分析する。その際、次の点に留意する。多国家横断的・多国家間的物語設定の役割。登場人物における“良きドイツ国民”としての倫理性と“平俗なドイツ国民”としてのナチ性。登場人物の有するナショナリティが特殊な歴史文化に基づくか、普遍的な倫理に基づくか。

3) 「作品本体」と「歴史文献」を照合し、作品がメディアの一種として提示しようとするナショナルないし反ナショナルな価値観や主張の本旨を洗い出し、映画が歴史事象の何を焦点化しているかを押さえる。

4) 「作品本体」の本旨と「言語メディア」の論調との関係の中で醸成されるドイツ・ナショナリズムの内実・力動性・複雑性など、その様相を観察記述する。

5) 毎年 of 新作品に関しても随時考察を進め、通史を作成し、「新展開」の行方を見定める。

新研究課題

1) 受賞作を「東ドイツ」「移民」「社会病理」「ナチ」の4テーマに類別し、まずは「東ドイツ」をテーマとした受賞作品を洗い出す。2) 「難民としてのドイツ人」という視点から、作品の物語構造を分析する。

3) 作品の「物語構造」とドイツ要人の「公式演説」を照合し、作品の政治的な立ち位置を洗い出す。

4) 作品が現代の難民事情に対して如何なる立場で関与し得るかを検証する。

5) 「難民としてのドイツ人」というセルフ・イメージの来歴を整理する。

4. 研究成果

(1) 《ハンナ・アーレント》(論文)

映画《ハンナ・アーレント》(2013年作品賞銀賞)に登場するハイデガーのイメージが如何なる意味を有しているかを分析・解釈し

た。その解釈内容の要旨は次の通りである。まず映画の中のハイデガー像には「子供」のイメージが与えられている。それは、一方においてドイツ国民一般における凡俗なドイツ精神を意味し、この凡俗さはナチズムを支えることにもつながった。しかし、他方において「子供」のイメージは、ナチの問題に関してハイデガーを非当事者にする働きも持つ。これによってハイデガー哲学に代表されるドイツ精神の偉大さは、凡俗なドイツ精神から切り離され、そうした偉大さを救出するための理論構造がもたらされる。よって、ドイツ国民の凡俗さは、むしろハイデガー的な思考実践の欠如を意味する。この思考実践はギリシアにその起源を持ち、本来の正統なドイツ精神として、ナチズムの対極に位置づけられる。そして、このドイツ精神は普遍性を持つとされ、よって映画《ハンナ・アーレント》の主張は、一種の精神的なドイツ・グローバリズムを称揚することにあると言える。

(2) 旧「白バラ」映画(論文、発表)

ナチ抵抗グループ「白バラ」を題材とした2つの映画《白バラは死なず》と《最後の五日間》(共に1983年作品賞銀賞)を分析し、それらの中で如何なるドイツ・アイデンティティが描き出されているかを考察した。その考察内容の主旨は、それぞれ次の通りである。

まず《白バラは死なず》は、従来の「白バラ」像が有する英雄的・贖罪的な自己犠牲的神話像を崩す作品である。映画の思想的背景は宗教性や道徳性よりも政治哲学を基盤とし、登場人物の行動は極めて政治的な動機づけを与えられている。その個々の行動も理想を追求するという性格のものではなく、武装蜂起を計画するなど、ナチ政権を打倒するために実効性のある現実的な手段を選択しようとする。登場人物は英雄というよりは普通の等身大の学生である。彼らは生き延びる道を模索するが、結果的には処刑されてしまったために、映画の中の位置づけでは、運動は挫折し、運動の有意義性は部分的なものに留められている。したがって、映画が最終的に提示するのはドイツ・アイデンティティの自己解体である。

他方、《最後の五日間》は、多くの点で従来の「白バラ」像の自己犠牲的・贖罪的な性質を引き継いでいる。主人公の行動はキリスト教的な道徳観に動機づけられており、政治的な問題であっても道徳的問題、そして宗教的問題へと昇華させられる。主人公はナチの行いに関して国民の一人として罪の責任を感じており、その行動は贖罪的な自己犠牲に基づいて理想主義的なものを指向する。映画の中にはキリスト教的なモチーフがちりばめられており、この世界は神の救済によって理想的な世界へと浄化されなければならない。しかし、神による救済は主人公の死後においてのみ期待され、抵抗運動の意義は、観念的な影響力へと限定される。よって、映画

が提示するのは、ドイツ・アイデンティティを贖罪の文脈において自覚することである。

(3) 「白バラ」追悼記念講義(論文)

ミュンヘン大学では「白バラ」事件の犠牲者を追悼する記念講義が行われるようになったが、特にドイツ大統領による講義内容を取り上げ、その中に描き出される「国民物語」の様相とその政治的効用を分析・考察した。その内容の主旨は、それぞれ次の通りである。

ヴァイツゼッカー大統領の記念講義(1993年)が描き出した物語は、「白バラ」の抵抗運動がヨーロッパの伝統的な政治的・倫理的文明を蘇らせたとする一種の復活物語である。「白バラ」のメンバーを主人公とするドイツ国民物語の政治的効用としては、「白バラ」を巡る従来の挫折物語を否定することで、それが背景に持っていた「ドイツ特有の道」論を払拭するという意義が考えられる。

次いで、ラウ大統領の描き出した物語は、「白バラ」の抵抗運動が刻んだ歴史を、戦後のドイツ国民が読み解き、その中にドイツ本来の精神性を探り当てようとするドイツ精神探究の物語である。戦後のドイツ国民全体を主人公とするラウのドイツ国民物語は、かつてヴァイツゼッカーがナチの時代を指して呼んだドイツ史における「異常で非連続的な一章」をむしろ連続的に延長させ、そこに戦後ドイツの取り組みを政治的に上書きする。これによってナチの負の歴史を自らの戦後史の中で生産的に消化しようとする試みなのである。

そして、ガウク大統領が描き出した物語は、個々のドイツ人が抵抗の能力を身につけるようになる人格成長の物語である。ドイツ人個人を主人公とするガウクの物語は、最終的に民主主義的な連帯を通じて非民主主義的な価値に対して抵抗を行い得るようなドイツ国民への政治的成長を促す物語でもある。

(4) 《白バラの祈り》(論文、発表)

ナチ抵抗グループの「白バラ」を題材とした映画《白バラの祈り》(2005年ドイツ映画賞作品賞銀賞)を分析し、その中で示される良きドイツ国民像がドイツ国民として如何にあるべきかを規定するドイツ・アイデンティティとして、どのように描き出されているかを考察した。その際は、同じく「白バラ」を題材とした2作品《白バラは死なず》と《最後の五日間》(共に1983年ドイツ映画賞作品賞銀賞)との比較考察を中心に、またヴァイツゼッカー大統領の「白バラ」追悼記念講義(1993年)との比較考察も交え、通時的な論争の場がどのように切り開かれ得るかを考察した。

結果として次のような知見を得られた。映画《白バラの祈り》では、良きドイツ国民ゾフィが「欧州」をナチ・ヒトラーから救済し、「新しい欧州」の樹立を他の欧州の諸国民との協力において実現することが目指さ

れる。すなわち、「新しい欧州」の樹立に邁進することこそが 道徳的・政治的自由の現実化 の最も顕著な具体化であるとされ、「欧州」というそうした多国家横断的・多国家間的な文脈の中にドイツ国民のあるべき姿としてのドイツ・アイデンティティの自覚が求められる。そして、映画が切り開く論争の場では、「良いドイツ」を含む 一つの欧州が「悪いドイツ」との対立関係にもたらされ、場合によってはその 一つの欧州 を「良いドイツ」が主導するという構図が形成された。

したがって、映画《白バラの祈り》が切り開く公共圏においては、ドイツ的なものの正統性を巡る争いが生じており、この映画はナチ・ドイツから切り離されたナショナル・アイデンティティの形成を模索する試みであったと言える。

(5) 映画メディアとグローバル化(論文)

急速に進行する政治的・経済的なグローバル化の底流に横たわっている「気分」のボーダーレスという美的情感的なグローバル化の存在を主に映画メディアとの関係において指摘し、それを自覚的な歴史認識にもたらしすことを試みた。

そのために、まずは20世紀前半にアメリカ映画と欧州映画との間に生じた「芸術」概念を巡る攻防を考察した。次に、一定の権威を備えた「芸術」という概念の誕生を巡る歴史を概観した。そして、20世紀において「芸術」という概念がすでに崩壊しており、これによって「芸術」なるものが実は哲学者ダンターが言うところの古代ギリシア哲学によって閉じ込められた「怪物」であったことが確認される。

内容をより詳しく述べるなら次のようになる。かつて模倣の技術一般は社会を惑わす「怪物」であったが、古代ギリシアの哲学者プラトンによって現実の世界を逐われて仮象の世界の存在とされた。西洋近代になると、模倣の技術は「美しい仮象」の世界という聖域を手にいれて「芸術」と呼ばれるようになった。やがて、複製テクノロジーの出現によってこの仮象性が崩壊し、解き放たれた模倣の技術は特に娯楽物語映画を基盤に現実の世界に戻ってきた。この新しい模倣の技術は「アート」と呼ばれ、再び実践的・政治的に振る舞い始めた。すなわち、模倣の技術は20世紀になって「怪物」としての本性を取り戻し、「遊び」を本質とする「アート」として世界を同質化しつつ、世界に「気分」のボーダーレスをもたらす存在になった。

(6) 現代ドイツ映画の資料集(図書)

2001年から2009年にかけてドイツ映画賞作品賞を受賞した作品を中心に、映画前半の物語を紹介・整理した資料的冊子を作成し、学部共通教育の授業で配布し、テキストとして使用した。

* これより新研究課題の内容と重なる

(7) 「集団の罪」(論文)

戦後のドイツを襲った「集団の罪」という国際世論は、ドイツ・アイデンティティを大きく揺るがすテーマであったが、戦後直後その問題性がどのような形で自覚されていたかを、トーマス・マンとカール・ヤスパースとの比較考察とを通じて明らかにした。

トーマス・マンは「良いドイツ」と「悪いドイツ」の同源性、いわゆる「一方のドイツ」と「もう一方のドイツ」との一体性を強調し、一つのドイツ論に基づいて事実上、罪の集団性を認めた。マンによれば、ドイツの本質は良き「世界市民主義」と悪しき「偏狭主義」との融合である。彼は、ドイツ人が世界に分散することによってドイツ人の良き側面が全世界に散らばることを願った。しかし、マンの主張はドイツ人であることの当為を欠いており、したがって、マンの見解は事実上、ドイツ・アイデンティティの非焦点化を指向している。

他方、カール・ヤスパースは集団の罪を明確に拒絶した。マンは罪の概念を4つに区別したが、これによれば集団的な罪は政治上の罪と形而上学上の罪だけであり、刑法上の罪と道徳上の罪は個別的である。しかも形而上学上の罪に関してはすべての人間に与えられているものであるゆえ、他者が客観的に罪の集団性を正当に要求できるのは、政治上の罪だけということになる。確かにヤスパースは「集団の罪に特有の意識」の存在は認める。しかし、これは人倫性とドイツ・アイデンティティとが融合したエートスのことであり、人が罪の共同性を主観的に感じ取った場合に、ドイツ人としてどうあるべきかを追求する形で一種の任務として感じられる個人の意識のことである。

(8) ヒトラー暗殺未遂事件(論文)

一般に「7月20日事件」と称される1944年のヒトラー暗殺未遂事件がある。これについては、後にドイツ要人による追悼記念演説が催されるようになった。本研究では、特に1954年から1979年までの演説を取り上げ、当時の東西冷戦状況を鑑みながら、演説に表れるドイツ・アイデンティティの解釈を試みた。

1949年に行われた演説の中で、テオドア・ホイスは「集団の罪」を牽制するため「集団の恥」の概念を提起した。その後、1954年に行われたホイスの演説では、さらにそうした恥が拭い去られ、ドイツの名誉が回復される可能性について言及がなされる。

同じく1954年に行われたコンラート・アデナウアーの10周年追悼演説では、暗殺未遂事件の実行者を自分たちにとっての「模範」とであると称し、暗殺未遂関係者の名誉を取り戻そうとした。そうした言説はドイツ再軍備の動向とも結びついていた。

1964年に行われたハインリヒ・リュプケの追悼演説では、事件によってドイツの「恥辱」が拭い去られドイツの名誉が回復される可能性が生じたが、そうした潮流は1933年のヒトラー政権発足の頃からすでにドイツの「伝統」として存在していたと主張される。そして、1944年の「7月20日事件」を東ドイツにおける1953年の「6月17日事件」と並置することで、ナチ政権と東独政権の同質性を示そうとした。

1969年に行われたグスタフ・ハイネマンの追悼演説では、政権交代のためこれまでの傾向から大きく変化する。演説では、ドイツにおける「最良の伝統」の存在と同時に「最悪の伝統」の存在も指摘され、ドイツは自由で民主的な国家には自力で至ったことはない」と主張される。そして、民族主義の台頭を警戒し、ドイツ・アイデンティティの代わりに欧州アイデンティティの確立が主張される。

1974年と1979年に行われたヘルムート・シュミットの演説では、ナショナル・アイデンティティの問題を離れ、「7月20日事件」の精神を内面的に普遍化する方向性が強調される。これは言わば人間一般としてのアイデンティティの確立が主張されていることを意味し、その背景には60年代から70年代にかけて生じた左翼過激派によるテロ事件の影響がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

古川裕朗「ドイツ映画《ハンナ・アーレント》におけるハイデガー像の解釈」『広島修大論集』55(1)、53-74頁、査読無、2014年

古川裕朗「2つの旧“白バラ”映画を巡るドイツ・アイデンティティ：“Die weiße Rose (白バラ)”と“Fünf letzte Tage (最後の五日間)”」『広島修大論集』55(2)、147-169頁、査読無、2015年

古川裕朗「大統領「白バラ」追悼記念講義と戦後ドイツの国民物語：ヴァイツゼッカー/ラウ/ガウク」『広島修大論集』56(1)、107-121頁、査読無、2015年

古川裕朗「映画《ゾフィ・ショル》における良きドイツ国民像 旧「白バラ」映画との比較考察を通じて」『広島修大論集』56(2)、49-71頁、査読無、2016年

古川裕朗「遊び」とグローバリゼーション「アート」という怪物」『修道商学』57(2)、121-144頁、査読無、2017年

古川裕朗「「集団の罪」を巡るドイツ・アイデンティティ トーマス・マンとカール・ヤスパース」『広島修大論集』58(1)、151-167頁、査読無、2017年

古川裕朗「7月20日事件」追悼記念演説を巡るドイツ・アイデンティティ 東西冷戦下、1954年から1979年まで」『広島修

大論集』58(2)、177-198頁、査読無、2018年

〔学会発表〕(計1件)

古川裕朗「21世紀ドイツのナチ映画が描く“良きドイツ国民”像 新旧「白バラ」映画の比較考察を中心に」

〔図書〕(計1件)

古川裕朗『現代ドイツ映画 2001-2009』レタープレス株式会社、2016年、計52頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

古川 裕朗 (Furukawa, Hiroaki)
広島修道大学・商学部・教授
研究者番号：20389050

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()